

歴史回覧 -history-



下松市は、豊かな自然と歴史が育んだ伝統文化が息づくまちです。古くから人々が暮らしてきたこの地には、天王森古墳や花岡八幡宮など、貴重な歴史遺産や文化財が数多く存在し、古代からの歴史を物語っています。また、稲穂祭などの伝統行事や、地域に伝わる歌舞伎など、地域特有の文化が根付いています。

天王森 -tennōmori-

天王森古墳出土埴輪

令和2(2020)年市街地からほど近い高台に位置する天王森古墳から山口県初出土品を含む西日本有数の形象埴輪群が出土しました。古墳は全長45mの前方後円墳で約1500年前の6世紀前半に築造されたと推測されています。平成29(2017)年には市指定史跡に登録されました。

出土した埴輪は、大阪府高槻市にある真の継体天皇陵ともいわれる今城塚古墳から出土したものと形状が酷似し、古墳の被葬者は当時の王権とも密接につながった実力者と見られています。

出土した埴輪や市内にある多くの遺跡、古墳は、古代から天然の良港を背景に発展してきた下松の住みよさを示す証拠として、今後の研究に期待が寄せられています。



大刀形



全長120cmで大刀形埴輪の全形復元は中四国・九州地方では初めてです。

大刀形埴輪には一般的に、柄の一部に鹿角(ろっかく)製の飾りが付いたものと、付かないものがあります。この埴輪は鹿角製の飾りが付いた大刀を模し、鞘に付いたヒレのようなものと線刻により、盾を表現しています。

巫女



髪型は、前後でゆったり折り返される島田髷(しまだまげ)風。衣装は、上衣が意須比(おすひ)といわれる袈裟状のものを右肩から下げ、襷(たすき)を掛けています。通常巫女は、下衣にスカート状の裳(も)を着用していますが、この埴輪は下側が円筒の半身像です。装飾品として、首にボタン状の粘土を貼り付け、ネックレスが表現されています。

家形



高さ約70cm、幅約80cmで大きな破風(はふ)を持つ切妻屋根を載せた家形埴輪です。天王森古墳からはこのほか、まったく形態が異なる家形埴輪が2棟以上出土。花園大学の高橋克壽教授は、この埴輪について、「家畜小屋や厩舎(きゅうしゃ)などの施設で、被葬者が馬を所有していた可能性も考えられる」と解説しています。

花岡 -hanaoka-

花岡八幡宮

和銅2(709)年、大分県の宇佐八幡宮より分霊を勧請し、創建されたと伝えられています。大内義隆による社領の奉獻をはじめ、天下統一を成し遂げた豊臣秀吉も参拝するなど、数々の歴史人物から崇敬を集めてきた由緒ある神社です。勧請の際、一夜のうちに山が花で覆われたという伝説から、花岡八幡宮と名付けられました。宝物殿には、江戸時代の神事を描いた絵馬や、日本一の大きさとされる「破邪の御太刀」などが奉納されています。また、花岡八幡宮の九つの社坊のうち唯一現存する閼伽井坊の境内にある「多宝塔」は、国の重要文化財に指定されています。



閼伽井坊多宝塔 (国指定重要文化財)

藤原鎌足が創建したと伝えられる八幡宮日本十六塔の一つに数えられ、高さ約13メートルのこけら葺き屋根の建物です。下重が方形、上重が円形という独特の平面を持つ二重の塔で、頂上には相輪が備わっています。日本建築において、円形の平面を持つ塔は非常に珍しく最大の特徴と言えます。繊細な木組みによって、優美な姿を保っており、その美しさは多くの人を魅了しています。



破邪の御太刀 (市指定有形文化財)

安政6(1859)年、吉田松陰ら攘夷派の志士と志を共にする氏子たちが、「邪氣を払い、平和な社会を築く」という願いを込めて奉納した大太刀です。全長4.65メートル、重量75キログラムと、日本刀としては最大級の大きさで知られています。通常は花岡八幡宮の宝物庫に保管されており、年に一度、稲穂祭(11月3日)の際に一般公開されます。



絵馬 (市指定有形民俗文化財)

縦1.83メートル、横3.84メートルの大きな絵馬に、寛政期の花岡八幡宮例祭における御神幸の様子が詳細に描かれています。山陽道の宿場町や町並、祭礼の奉納行事、演芸、風俗などが生き生きと表現されており、当時の様子を如実に伝える貴重な史料です。

下松市観光ボランティアガイドの会でツアーの事前予約すると、特別に見学することが出来ます。 TEL:0833-45-1541

宮ノ洲 -miyanosu-

宮ノ洲古墳出土鏡 (国指定重要文化財)

享和2(1802)年に砂州の上にあった宮ノ洲古墳から四面の銅鏡が出土しました。瀬戸内海沿いには同じような銅鏡が出土した古墳がいくつか存在し、瀬戸内海航路を重視していたヤマト王朝から、同盟関係の証として瀬戸内海の首長たちに配られたものだとされています。



三角縁神獸鏡

三角縁神獸鏡



出典: Col Base

三角縁盤龍鏡

内行花纹鏡

切山 -kiryama-

切山歌舞伎

切山地区に伝わる伝統的な歌舞伎です。江戸時代中期、地元の長重良が大坂で人形浄瑠璃や歌舞伎を見て感銘を受け、息子三四良を修行に出します。3年の修行の末、村に帰った三四良が若い衆に教え、宝暦7(1757)年の切山八幡宮秋祭で初めて上演したのが始まりとされています。以来、地元住民によって代々受け継がれ、現在では県の無形民俗文化財に登録され、切山歌舞伎保存会がその伝統を継承しています。

